
龍神様と花嫁

七里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍神様と花嫁

【Nコード】

N8730Y

【作者名】

七里

【あらすじ】

むかしむかしに村を救った龍神様への感謝を込めて百年に一度行われる龍華祭。その主行事であり神事である“龍嫁の儀”の主役、栄誉ある花嫁役に選ばれたのは決して選ばれる筈のなかった娘、龍神様に捧げられし最初の娘にして唯一拒まれし花嫁の血を引く娘、フユだった。

マイペースで暢気でちよっぴり天然な龍神様と、気の強さは人一倍胸にイチモツ秘めて龍神様に嫁す事になった村娘の物語。

ノさっくりと楽しめる物語を目指して投稿させて頂きました。ゆっ
たり更新になりますが宜しく願います。

龍神様と花嫁 1

それは何処にでもあるような、ありふれた昔話

むかしむかし、日照り続きで貧窮する山間の小さな村に一匹の龍が降り立ちました。

雨雲を呼び、雨を降らせ、涸れかけた泉に水を満たし、山を田畑を潤し村を救ったその龍を人々は“龍神様”と呼び、崇め、奉ります。慈悲深い龍神様は永久の加護をと願う人々の想いに応え、天へは帰らず泉を棲み家として水底より村を見守る事にしました。

感謝した村人たちは龍神様がひとり寂しくないようにと村で一番美しい娘を花嫁として龍神様に捧げ、捧げられた娘は龍神様と共に泉の水底へと姿を消しました。

その後、龍神様の御姿を目にした者も娘の姿を見掛けた者もありませんでしたが二度と村を囲む山々が枯れる事はなく、どんな酷い日照り続きの時でも村が旱魃に悩まされることはなくなりました。

山奥にあるという決して枯れる事のない泉。その泉には今も龍神様が棲み、捧げられた花嫁と共に村を見守り続けているという。

緑深い月夜の山の中。

純白の着物に包まれて、板張りの上にふかふかの座布団を敷いただけの何とも微妙な乗り心地の輿に揺られながら、フユはこっそりと溜息を漏らした。

前後に二人ずつ。掲げられた提灯の僅かな明かりを頼りに輿を担ぎ歩を進める男たちに言葉はなく、ただただ無言の道行きを続けること数刻。普段人の通ることのない平坦とは言い難い山道を、乗っているだけとはいえ板切れ一枚の上で揺られ続けるのは拷問に近い。いい加減筋肉痛になりそうだと思いつつながら転げ落ちないように板に取り付けられた紐をギュッと握り直したフユはもう一度、もう何度目になるか分らない溜息をそっと零した。

頭に浮かぶのは村に伝わる古い古い伝承、日照り続きで貧窮していた村を救った龍神様と龍神様に捧げられた娘の話。それは村に住む人間なら誰もが知っている昔話で、龍神様への感謝を込めて百年に一度、花盛りの頃に行われる“龍華祭”は遠く離れた都からも見物に訪れる者がいる程に有名なお祭りだ。

龍神を讃える舞を舞い、楽を奏で、唄を唄い、村の特産品である珍しい果実や稀少な山菜、新鮮な魚等を用いた料理を色取り取りに色付いた花々を愛でながら食し、月が中天に至る頃肅々で行われるのが龍華祭の主行事である“龍嫁の儀（りゅうかのぎ）”、別名「龍神様の嫁取り」と呼ばれる神事である。

龍神様に捧げられた娘を模して花嫁役に選ばれた娘が純白の着物に身を包み、龍神様が棲まうという山奥の泉まで輿に乗せられ運ばれて、花嫁と入れ替えに“龍酒”と呼ばれる酒好きには堪らない極上の酒がなみなみと詰まった酒樽が輿に乗せられ村まで運ばれ集まった人々に振舞われる。そうして月明かりの下続けられた祝宴は夜が明ける頃に漸くお開きとなり、村人たちは村を守り続けて下さる龍神様へ感謝の祈りを捧げつつ眠りに付くのだ。

それだけ聞けば山奥の村に伝わる、何てことない神事のひとつなのだがこの村の祭りには村人たちのみが知る秘事がある。それは昔話では語られない、龍神様と村人たちの間で交わされたある約束に由来するもので、その内容を知る村の娘たちは当然の如く花嫁役に選ばれることを拒んだ。花嫁は純潔であることが最低限の条件であるため祭りの年が近づくにつれ娘たちは我先にと結婚してしまい、気が付けば村に残された年頃の娘は一人きりになってしまっていた。

そうして選ばれたのが本来ならば決して選ばれなかった筈の娘、龍神様に捧げられし最初の娘にして龍神様に拒まれし唯一の花嫁の血を引く娘、フユだった。

ぼんやりと花嫁として選ばれることになった経緯を思い出していたフユは、不意に開けた視界に我に返り、目を瞠る。

目の前にあるのは月明かりを受けて淡く輝く、どこか幻想的な光に包まれた不思議な泉。その美しさに魅入られたように心を奪われ、いつの間にか地面に下ろされていた輿から降りたフユは、膝まづく男たちの存在など目に入らぬかのようにふらふらと泉に歩み寄った。

そうして操られるように進むフユの足が泉の淵へと辿り着いた瞬間の事だった。ドオオオ と。凄まじい勢いで水柱が立ち昇り、一瞬の後には何事もなかったかのように静寂が辺りを包み込んだ。

後に残されたのはあまりの出来事に驚きのあまり腰を抜かし尻餅を付いた四人の男と、花嫁が立っていた場所にでんと置かれた大きな酒樽がひとつ。

我に返った男たちは恐怖に打ち震える体を叱咤し、花嫁を運んで来た輿に酒樽を括りつけると這々の体でその場を後にしたのだった。

龍神様と花嫁2

龍神様に会ったら絶対に言ってやろうと決めていた事がある

ぱちり、と。瞼を開くと同時に覚醒したフユは一瞬、自分が何処にいて何で寝ていたのか分からず混乱した。困惑しながら横たわっていた体を起こし現状を確認しようとして周囲を見回したところでピタリ、とその動きが止まる。

「ッ……！」

思わず飛び出そうになった悲鳴を呑み込み恐る恐る見上げる先に在るのはフユがずっとずっと会いたいと思っていた、村の守り神である龍神様の巨大な顔。

フユの身長よりも長い面長の顔に、青い鱗に覆われたとぐろを巻く長い体。頭部から背中にかけて摩くのは白銀色の、さらさらともも触り心地が良さそうな鬚。その巨大さを除けば一見して優美ともいえる御姿だけれど、猛禽類を思わせる鋭い爪のついた四肢と噛まれたら痛いどころじゃ済まないだろう口の隙間から覗く鋭牙を目にして血の気が引いた。

「気分はどうだ？」

そんなフユを余所に発せられたのは平時であれば聞き惚れそうな、何とも耳に心地よい美声。穏やかな声音で空気を震わせたそれはフユを案じるものだったけれど、だからといって安心は出来ない。“龍”とはそもそも気紛れな生き物なのだ、機嫌を損ねれば自分など一溜まりもないだろう。心の片隅でそんな事を思いつつ「大丈夫です」と小さく返したフユは、怯えてしまった心を取り繕うように居住まいを正し、しゃんと背筋を伸ばして龍神様、と思われる存在と向き合った。

「龍神様、ですか？」

状況から判断すればそれ以外では有り得ないのにちよつと間抜けな質問だな、と。そう思いながらも確認のために問い掛ける。フユが此処に居るのは否応無い村の決定によるものだけれど自分の意思でもある。“花嫁”など嫌だと逃げ出すことも出来たのにそうしなかったのはどうしても“龍神様”に会って言いたいことがあったからだ。だから「是」との応えにフユは一旦瞼を閉じ気持ちを静めるように深く深呼吸をして、それからゆっくりと閉じた瞼を開き、その青い瞳で真っ直ぐに龍神様を見つめた。

「“フユ”を、龍神様に捧げられた最初の娘を憶えていらっしやいますか？」

最初の怯えが嘘のような毅然とした物言い。ひたと己を見つめる凜然としたその瞳に“龍神様”と呼ばれる彼はふと既視感を覚え、その瞳の色が青色であることに気付き驚きに目を瞠った。

彼の守護する村の住民が持つ色は黒。黒髪黒目の民で、昨今外との交流が盛んになり黒以外の色を持つ者が生まれていても不思議はな

いが目の前の娘の持つ青は彼にとってはとても馴染み深い、深い深い純粋な青。それは人が持ち得ない、龍の色。

気付いた彼の脳裏に遠い遠い、記憶の底に眠っていた情景が蘇る。

“フユ”

懐かしげに囁かれたその声に、肯定と受け取ったフユの怒気が一気に膨れ上がる。龍神様の不思議そうに首を傾げる様(さま)に更に怒りを煽られたフユは「お話があります」、そう言っただけでひとつ大きく息を吸い込んだ後、積もりに積もった怒りの丈をぶつけるかのように怒声を発した。

「この、すつとこどつこいのヤリ逃げ無責任ヤロ

ッ

!!!」

言いたくて言いたくて、ひと言言っただけでやらねば気が済まなくて、ずつとずつと溜め込んできた言葉。年頃の娘が大声で叫ぶのはどうかと思うそれを思いつきり叫んでちよつとだけすつきりしたフユは、あんぐりと口を開け、目を見開いて固まっている龍神様を見て少しだけ溜飲を下げるもまだまだ足りないと言わんばかりにキツと眼前の尊顔を睨みつけて言葉を続けた。

「事情は知ってます、聞いてます。“フユ”が願った事だということも知っています。これが只の八つ当たりだという事も解っています。解った上で敢えて言わせていただきます。いくら請われたからといってほいほい手を出さないで下さい！出すなら出したで最後まで面倒を見る。見れないなら最初から手を出さない。いい歳した大人なんですからその位の分別はもって下さい。そもそも事の発端は龍神様の悪戯心だそうではないですか。そりゃあ村を救って下

さつた事はありがたいことだと思えます。思いますが嫌なことは嫌だとはつきり断つて下さい。下手に罪悪感持つて手を出した上一度抱いたらポイ、その後は何の音沙汰もなしだなんてどんだけ無責任なんですか。ええ知ってます。聞いてます。異種族間だと子が出来にくいから大丈夫、出来ない、問題ない。そんな軽い気持ちで避妊もせずあつさりちゃっかり中に出しちゃったんですね。ええええ、分かります。龍神様といえど所詮は生身の雄。子孫を残すための種付けは雄としての本能なのでしょう。でも！ だからこそ！ 出したら出した、ヤツたらヤツたでちゃんと責任取つて下さい。子が“出来にくい”であつて“出来ない”ではないんです。お陰で私たちがどれだけ苦労したと………」

生まれて十八年。溜めに溜め込んだ鬱憤を怒涛のように吐き出すフコの勢いに吞まれ、グサグサと遠慮容赦なく突き付けられる言葉の刃を大人しく聞いていた龍神は、やがて言葉が尽きたのか陽が昇り始めた頃になつて漸くふうーと大きく息を吐き口を閉じた娘を見てほつと安堵の吐息を吐いたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8730y/>

龍神様と花嫁

2011年12月2日00時53分発行